

令和5(2023)年3月31日

28号

# 八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年2回発行



令和4年度秋季企画展『八尾を掘る—40年の軌跡—』から

公益財団法人八尾市文化財調査研究会は、令和4(2022)年7月に設立40年を迎えました。

この間、当法人は、八尾市内において膨大な数の発掘調査を行ってきました。その結果、日本史に多大な影響を及ぼすような素晴らしい成果を数多く挙げてきました。

今回の秋季企画展では、当法人のこれまでの40年を、10年単位で4期に区分し、各期の当法人の様相を示す時期区分名称として、始動期、発展期、成熟期、再生期と呼称し、それぞれの時期で特に注目すべき成果を抽出し展示しました。

始動期とした昭和57年度からの10年間は、当法人が調査員2名で発足し、途中4名を増員することで、調査体制を整えた時期に当たります。この時期の大きな成果としては、跡部遺跡

で発見された弥生時代中期の流水文銅鐸が挙げられます。発見当時、平野部で見つかった銅鐸として全国的に注目を集めました。

発展期とした平成4年度からの10年間は、大規模開発に伴う調査が多数行われた時期に当たります。当法人では、さらに3名を増員、体制の充実をはかりました。この時期の特筆すべき成果として、大竹西遺跡から出土した弥生時代後期初頭の鑄造鉄剣が挙げられます。発見当時、近畿地方最古の鉄剣としてマスコミ等に大きく取り上げられました。

成熟期とした平成14年度からの10年間では、八尾市からの受託事業である国庫補助による市内遺跡調査が始まったほか、大小様々な規模の本調査が行われた時期に相当します。この時期では、小阪合遺跡において古墳時代前期の水辺の祭祀遺構が発見され、内行花文鏡、勾玉、鉄剣のいわゆる三種の神器が出土し、注目を集めました。

再生期とした平成24年度からの10年間は、当法人からはじめて定年退職者を出し、それに伴い新しい調査員を増員した時期にあたります。組織の世代交代が進む中、次世代へ発掘調査技術の継承が行われつつある時期とも言えるでしょう。この10年間では、東弓削遺跡の調査で発見された由義寺塔基壇が脚光を浴びました。女帝称徳天皇と本市ゆかりの法王道鏡が造営に深く関わったとされる由義寺は、正史である『続日本紀』に寺名が記載された由緒ある寺院です。幻の寺院の塔基壇が見つかったことから、現地説明会には2,500名もの考古学ファンが集まりました。

今回の八尾・よろず考古通信では、秋季企画展で取り上げた遺跡のうち選りすぐった遺構や遺物を掲載し紹介いたします。

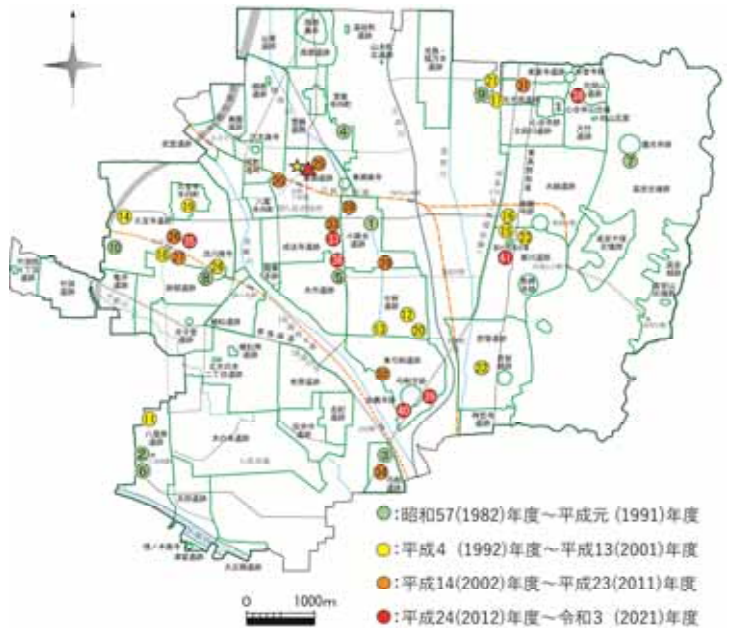


図1 調査地位置図

### 跡部遺跡第5次調査(図1 ⑧ 写真1・2)

本調査では、弥生時代中期(BC 1世紀頃)の流水文銅鐸(扁平鈕式一区流水文銅鐸)が発見されました。埋納坑(1.29×1.15m)の中央部分に銅鐸の緒を上下にして、鐸口を北西に向けた状態で埋められていました。

銅鐸は偶然発見されることが多い中、今回は発掘調査で埋納方法がわかった貴重な例です。



写真1 銅鐸埋納坑検出状況(弥生時代中期)



写真2 流水文銅鐸(弥生時代中期)

### 大竹西遺跡第3次調査(図1 ⑬ 写真3)

本調査では、土坑から弥生時代後期初頭(1世紀)の鑄造鉄剣が出土しました。鑄造段階に発生する鬆(す)の存在が認められたことから、鑄造鉄剣であることがわかりました。

この鑄造鉄剣は、国内における鑄造鉄の製作時期や製作場所を考えるうえで大変貴重な資料です。



写真3 鉄剣出土状況 (弥生時代後期初頭)

### 小阪合遺跡第41次調査(図1 ⑳ 写真4～7)

本調査では、河川の岸辺付近にある大木の周辺で、古墳時代前期後葉(4世紀後半)の水辺の祭祀跡が発見されました。

祭祀には、三種の神器とされる「鏡」「玉」「剣」のほか、祭祀用石製品や土器類を用いていたようです。三種の神器については揃って出土することは大変珍しく、貴重な資料と言えます。



写真4 水辺の祭祀跡検出状況



写真5 鉄刀出土状況



写真6 勾玉出土状況



写真7 鏡出土状況

## 東弓削遺跡・弓削寺跡 2015-347 の調査 国史跡 由義寺跡(図1 40 写真8～10)

本調査では、塔の基壇を確認しました。塔の基壇の規模は一辺約21m(天平尺で約68尺)の正方形です。塔の基壇は、平城京にある東大寺東塔の24m(約80尺)に次ぎ、大安寺の約21m(約68尺)や諸国の国分寺に匹敵する大きさで、東大寺や大安寺と同様に七重塔であった可能性が考えられます。塔基壇は粘質土と砂質土の薄い層を交互に突き固めた「版築」という工法で築かれてました。また、基壇中央部では、基壇を強固にするために30～60cm大の石を入れた掘込地業を確認しました。基壇表面を飾る地覆石(じふくいし)や羽目石(はめいし)などは抜き取られていましたが、凝灰岩の破片を含む溝の位置から、一辺約21mの正方形であったことがわかりました。残念ながら、塔の中心柱を支えた塔心礎をはじめとする礎石は失われていましたが、後世に掘られた穴の中から、四天柱あるいは側柱の礎石と推定される巨石が出土しています。

由義寺塔基壇周辺からはコンテナ1200箱もの多量の瓦が出土しました。この内、塔の軒先を飾ったと推測される軒瓦は、37型式42種類にのぼります。一棟の建物の屋根に葺かれていた軒瓦としては、その種類の多さが特筆されます。

これらの軒瓦は、全体の6割を占める由義寺塔専用に造瓦された軒瓦のほか、飛鳥時代後期(7世紀後半)に遡る六弁忍冬文軒丸瓦、8世紀前半～後半に比定される平城京内の寺院と関係の深い同範軒瓦が出土しています。また、難波宮と同範の軒瓦が出土しており、摂津職からも瓦がもたらされたことが判明しました。何らかの理由で、同時期に各地域から多くの軒瓦が集められたことが考えられます。

一方、平安時代後期に比定される仏坐像文軒瓦が出土していることから、由義寺の塔は当該期まで存続していた可能性が推測されます。



写真8 由義寺跡 塔基壇検出状況(南西から・奈良時代後期)



写真9 単弁十二弁蓮華文軒丸瓦



写真10 均整唐草文軒平瓦

### 令和4年度のイベントから

#### かがやき歴史講座

2022(令和4)年10月29日(土)と12月17日(土)には、八尾市生涯学習センターで秋季企画展に関連した講座を開催しました。演題は『ここまでわかった!八尾の歴史大発見の遺跡を振り返る』で、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が発掘調査を行ったうち、日本の古代史を揺るがすような発見があった遺跡を紹介しました。

#### 八尾・考古学散歩

2022(令和4)年11月19日(土)には、八尾・考古学散歩を実施しました。今回は、「久宝寺遺跡・東郷遺跡を歩く」と題し、久宝寺遺跡、久宝寺寺内町、八尾寺内町、東郷遺跡の主な発掘地点を巡り、主に寺内町形成以前の発掘調査成果を紹介しました。好天に恵まれ、参加者5名は総距離約7.0kmを散策し悠久の歴史に思いを馳せていました。

### 瀬戸内地域との交流を示す古墳時代初頭の土器を発見

東郷遺跡第44次調査(図1★)の土坑SK206からは、古墳時代初頭(3世紀前葉)の河内の土器(庄内式甕(3)などとともに讃岐や阿波の特徴を持つ大型複合口縁壺(1・2)が出土しました。

1は、西部瀬戸内系または讃岐系の壺で、頸部の立ち上がりがないタイプです。口縁部の内面には黒色の物質(漆?)を塗っています。また、2は、阿波系の壺と考えられます。やや外へ開く口縁部で強いヨコナデを施し、体部は球形で、外面に縦方向を基調とする磨きを施します。3は、いわゆる河内の庄内式甕です。小さな平底で、体部最大径は上位にあり、外面のタタキは右上がり分割して施し、内面はヘラケズリを施します。

東郷遺跡における当該期の西部瀬戸内系の土器の類例としては、八尾よろず考古通信23号で紹介しました同遺跡第85次調査(図1▲)から出土した複合口縁壺が挙げられます。

今回紹介した土器は、河内と瀬戸内との交流を考えることができる大変貴重な資料であります。

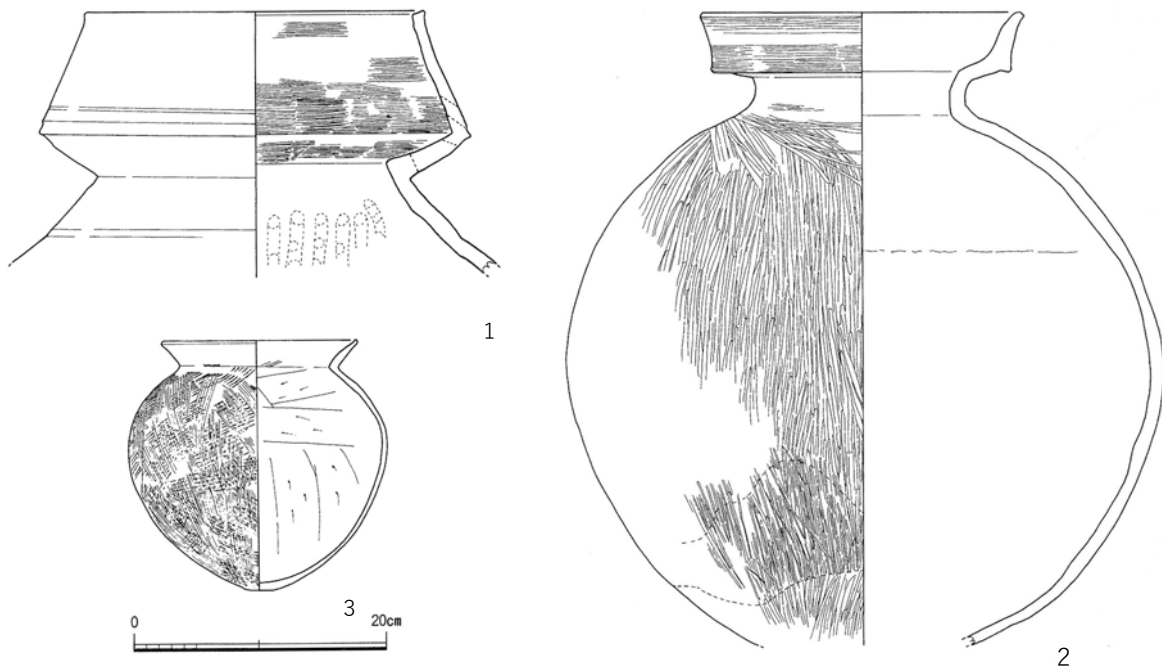


図2 土坑SK206出土遺物

#### 編集後記

世界を震撼させた恐ろしい新型コロナウイルスが世界中に蔓延してから3年が経過しました。感染者数は、増減の波はありますが、減少に向かっている今日この頃です。徐々にですが平穏な日常生活に戻りつつあり、対面での研究会を実施する場が多くなってきました。実物を見て、触れて様々な意見を述べる機会が増えており喜ばしく思います〈KN〉

#### イベント情報

- ◆通常展「八尾の地宝」－市立埋蔵文化財調査センター収蔵品展－  
内容：八尾市域の主な遺跡から出土した遺物を中心に展示  
期間：令和5(2023)年2月22日(水)～6月9日(金)  
時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)  
休館日：土・日・祝日  
但し5月21日(日)は休日開館



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌

『八尾・よろず考古通信 28号』

発行：令和5(2023)年3月31日

八尾市立埋蔵文化財調査センター指定管理者

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2

TEL・FAX 072-994-4700

E-mail：maibun\_zyao@white.plala.or.jp

